

正しい批判はいかにあるべきか (三)

——教条主義批判を装った修正主義——

山 本 二 三 丸

まえがき

第一節 予備的注意

第二節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その一)……(以上、本誌第二十一卷第一号所載)

第三節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その二)……(以上、本誌第二十一卷第二号所載)

第四節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その三)……(以上、本号所載)

第五節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その四)

第六節 榊氏による修正主義批判

第七節 榊氏の「教条主義批判」の客観的意義

むすび

第四節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その三)

一

さて、「日本共産党の革命路線にたいする異論の書」、「教条主義」というレッテルを、なにひとつ事実をあげず頭

正しい批判はいかにあるべきか

ごなしにおしつけることで全面的打倒という所期の目的の大半を首尾よくなしとげられた榊氏は、今度はその批判の鋒先きをかえて、個々の論点を攻撃する段取りに移られる。その書き出しは、こうである。

「山本氏の所説には、きわめて『勇しい』ことばのかげに危険なドグマが目立つ」。

では、その「『勇しい』ことば」というのは、どんな言葉であるか？ その「言葉のかげ」に「目立つ」ている「危険なドグマ」とは、なんであるか？ 榊氏は、右につづいて「たとえば」として賃銀についての二つの問題点を指摘されているが、拙著からの二つの引用箇所の中には、どこを探しても、「『勇しい』ことば」も「危険なドグマ」も、全然見当たらないのである。

「たとえば、労働者階級の組織と意識を革命に向けて高揚させる『真のマルクス主義的見地』がなければ『最低賃銀制実施』もかえって独占資本主義維持の道具立てになるとか（P 55）、『先進的な理論家の大半はブルジョア労働評価』や『同一労働・同一賃銀』をふりまわしている」（P 312）とか書いているが、これはいったい何を意味するであろうか？」

みられるように、榊氏は「……とか、……とか書いている」という口調で書き立てていられるが、こういう表現は、その内容がまったくお話にならないほど混乱していて取りあげるまでもないというときにはじめてつかわれるものである。つまり、榊氏は、右の表現を採用して、わたしの所論がまったく支離滅裂で、無意味な「ドグマ」の羅列ではないという御自分の印象をば、説明する手間をばういて、読者に伝えようとされたものである。そのためにその最後では、ことさら「これはいったい何を意味するであろうか？」という「疑問」体が採られている。はたして、榊氏の印象が正しいか、それとも、榊氏が問題の本質を全然わきまえないわけわからずのはったり屋であるか——事柄を吟味してみればすぐわかることである。

まず最初に指摘しておかなければならないのは、拙著の中から問題の箇所をとりだすさいの榊氏のやり方がきわめて作為的であつて、前後の脈絡から勝手にきりはなし、自分に都合の悪いところはきりすて都合のよい言葉ばかりつなぎあわせ、わたしの主張をことさらにゆがめ、改ざんして読者に示すという手法がつねにとられている、ということである。それゆえ、問題の箇所については、拙著の具体的な内容とつきあわして、榊氏がどの部分をどのようにとりだし、どのように「解釈」して、どのように歪めているかということを、事実によつてまず確かめる必要があるのである。

二

まず、「最低賃銀制」の問題について。

この問題が拙著でとりあげられているのは、その第一章「『構造改革論』とはどういうものか」の第二節「『構造改革』の具体的内容」の中である。わたしは、この第二節で、「構造改革論」者自身の説明にもとづいて、「『構造改革』というものの具体的内容は、要するに『独占支配の制限』の仕方ということに帰着する」（四六ページ）と述べ、佐藤昇氏が「経済の面での独占支配の制限の具体的内容」の「第一」としてあげていられる「独占の搾取を制限すること」の各種の方策について、いちいちこれを検討している。そこでは、佐藤氏は、「独占の搾取を制限する」ものとして、「賃銀闘争」、「労働時間短縮闘争」とならんで「最低賃銀制の実施、社会保障の拡充、大衆課税や独占価格の引下げ、完全雇用など」を列挙されているのであつて、わたしは、当然のことながら、「最低賃銀制の実施」がはたして「独占の搾取を制限する」ものであるかどうかを検討し、それが「比較的ものともよく『実施』されたとして

も」として、「第一に、この『最低賃銀』では人間労働力の正常な維持＝再生産はとうていおぼつかない」こと、
「第二に、この『最低賃銀』にすまぬぐまれない賃銀労働者、つまり失業者は、なんの賃銀も保障されない」こと、
さらに、「最低賃銀制の実施」によって賃銀引上げを強制されるのは、むしろ「低賃銀・長時間労働の中小・零細企業」であつて、それは当の「独占の搾取」にはむしろ有利に、中小・零細企業にはきわめて不利にはたらかざるをえないことを指摘して、つぎのように説明しているのである。

「いずれにせよ、『最低賃銀制の実施』が『独占の搾取の制限』になるという主張は、資本主義の基本的な経済法則をまったく無視した悪質のデマゴギーといわざるをえない。一般に『最低賃銀制の実施』が賃銀労働者の経済的状態の『改良』をもたらすものであることはうたがいないし、この点に、『最低賃銀制』の真の意義が存する。だが、これはあくまで、資本主義の存立を前提したうえでのものであつて、とうてい、資本主義の『構造』を『改革』するものではないし、『独占の搾取を制限する』ものなどでもありえない。最低賃銀制は、それ自体としてうたがいのなく、労働者階級の経済的地位の改善であり、経済的『改良』であるが、この『改良』を改良として正しく資本主義変革に役立てるためには、『改良』と『革命』との関係をたたく把握し、『独占ブルジョアジーを政治的に孤立させ』などという、内容空っぽのかけ声などふりまわすことをいっさいやめて、つねに労働者階級の組織と意識とを『革命』にむかつて高揚させ整備することに全力を傾けていっさいの闘争を指導する真のマルクス主義的見地に終始しなければならぬ。この真の正しい革命的地から逸脱するときには、この『最低賃銀制の実施』なるものは、かえつて全般的危機にある独占資本主義にとって、その維持＝存続にとって必要不可欠な道具立てのひとつとして役立つことにならざるをえないのである」(五五ページ)。

みられるとおり、マルクス・レーニン主義の見地からみれば、いずれも自明であり、当然のことを述べたまでである。ところが、ここに「わが国のマルクス・レーニン主義者」と自称する一「評論家」が現われて、「……とか……とか書いているが、これはいったいなにを意味するだろうか？」という、非難と侮蔑の言葉を投げつけているのであ

る。そこで、わたしは、賃銀論についてのマルクス・レーニン主義的常識について簡単な説明をし、この、もつぱら「やつつけ」を事とする「評論家」の非難に、こたえておきたいと思う。

最低賃銀制は、いうまでもなく、資本主義社会で、賃銀労働者の労働賃銀を一定の水準以上に——国家的強制力により——引上げることが定めたものである。だから、それは、賃銀労働者の経済的地位の改善、その引上げに直接役立つものである。資本主義社会では、その経済的發展法則の貫徹により、労働力Ⅱ商品の売手である賃銀労働者の売手としての地位はますます困難なものになり、資本家は、これらの法則の諸結果を利用しありとあらゆる口実で労働力Ⅱ商品の買叩きをおしすすめる。そのため、賃銀労働者の労賃は、その労働力の正常な再生産費はおろか、肉体的最低必要限度をも割るような劣悪な水準におし下げられる。この資本主義社会では、賃銀奴隷は、奴隷として必要な「餌」すら、十分には保障されない状態におかれている。それゆえ、賃銀労働者の利益のためにたたかうことを標榜する人々や組合や、あるいは政党は、まずもってこの賃銀の引上げのためにたたかなければならないのであって、最低賃銀制のための闘争の意義もそこにある。だが、この最低賃銀制は、あくまでも労働力Ⅱ商品の販売価格の引上げであって、それ以上のものではないこと、いいかえれば、それは賃銀奴隷を賃銀奴隷として維持し再生産するに必要な「餌」の割増しないしは若干の引上げであって、賃銀奴隷を奴隷状態そのものから解放するものではないということを、しかと銘記しておかねばならない。要するに、それは、資本にとつて、必要な労働力Ⅱ商品の売手たる賃銀労働者の経済的地位の改善にすぎない。そのうえ、最低賃銀制は、労働者階級全体にとって、その経済的地位の根本的改善をもたらすものではけつしてなく、局部的改善にすぎず、しかも、多くの場合、一時的改善に終る傾きがある。というのは、この最低賃銀制を制定する国家権力を握っているのは資本家階級、とくに独占資本家階層であつ

て、労働者階級の圧力におされてやむなくこれを制定したものの、その実質的効果を減殺することを必ず企てないではないからである。一方では、かれらは、最低賃銀制の適用範囲やその金額にさまざまな制限、例外規定をもうけたり、租税その他の財政々策を通じていろいろの負担を勤労大衆に転嫁することによって、労働者階級の経済的地位の実質的向上を阻止しようとたえずつとめ、同時に他方では、その制定の阻止に失敗して労働者階級の圧力のもとになんらかの形の最低賃銀制を制定せざるをえない破目になるやいなや、今度は手をかえて、このブルジョア国家、独占資本の支配する国家が、労働者階級の経済的地位の向上にもともと関心をもっていてそのために積極的にこの法律の制定につとめたものだとか、この資本主義社会では——各種の社会保障制度とあいまって——労資協調のもとに、労働者階級の経済的地位の向上、国民全体の生活の保障が首尾よく達成されうるし、自分たちはそのために万全の対策をたてているのだとか、さかんにふれまわるのである。ほんのすこしの経済的譲歩によって、——それもたいていの場合、なんらかの形で確実にとりかえすのだが、——賃銀奴隷をおとなしい「平和的」な奴隷につなぎとめることができ、賃銀奴隷制という、この独占資本にとつての楽園が保証されるというのが、かれらの基本的な狙いだし、そのためにあの手この手がつかわれるのだということ、——こういったことを全く知らなかったり、それが「何を意味するであろうか」まったくわからないような「マルクス・レーニン主義者」が、いったい、あるだろうか？

それだからこそ、どここの資本主義国でも数多く労働組合や労働者政党があつて同じように労働者の経済的利益のために、その経済的地位の改善のために活動し「たたかっている」にもかかわらず、それらの立場にはさまざまなものがあり、その「たたかい方」にもいろいろのものがあつたという、事実が生れてくるのである。

柿氏は、その批判論文の冒頭で「わが国のマルクス・レーニン主義者は、たえず右翼日和見主義、修正主義とたた

かつてきた」とか、「先駆的な闘争をおこなってきた」とか、さては「それによって、修正主義の危険な役割と本質はしだいに多くの人のびとに理解され、修正主義の理論的、実践的破綻もきわめて明瞭になってきた」とか述べたていられるが、労働者階級の経済的地位の改善のために「右翼日和見主義」者たち、改良主義者たちがどのように「たかつてきた」かを全く知っていないと御自身でこのように表明されているところからみると、どうやら右の「勇ましい自己礼讃」は、手前味噌を並べただけの「勇ましいドグマ」にすぎないという事実が、おのづから暴露されているといわなければならない。

榊君よ、よく聞きたまえ、右翼日和見主義者、修正主義者、改良主義者と、真のマルクス・レーニン主義者とは、同じく労働者の経済的地位の改善のためにたたかうとはいいいながら、それらの立場は正反対であり、したがってその「たたかい方」はまっこうから対立しているのだ。右翼日和見主義者、組合主義者、改良主義者たちは、労働者の経済的地位の改善を主張し、その実施を要求して「たたかう」が、それは、ほんのすこしの、一時的な経済的地位の改善をかちとることによって、この資本主義社会のもとで労働者の地位の向上、生活の保障が可能であるという考え方に労働者をひきいれ、労働者の「闘争」をもっぱら経済的地位の改良にだけおしこめようとするものである。資本主義をそのままにしておき、したがって資本の支配、賃銀奴隷制はそのままにしておき、ほんのわずかの経済的地位の改善によって、労働者の不満をそらし、資本主義のもとでも労働者の地位の不断の向上、生活の保障は可能であり、必然であるという説明によって、資本主義の矛盾を隠蔽し、賃銀奴隷の自覚をおしころし、資本主義の存続、つまり賃銀奴隷制の永遠化を説くという社会的な役割をはたすことになる。それゆえ、たとえかれらがなんと自称しようとも、このような主張をかかげる者は、よしんばその人がまったく誠実であって真に労働者のためばかり考え

て行動したとしても、客観的には、労働者たちを墮落させ無力にするブルジョアの手先きとして、労働者の地位向上どころか、その隷属状態の永久化に貢献していることになるのである。

マルクス・レーニン主義者も、もちろん、資本主義のもとでの労働者の経済的地位の改善、向上のためにたたかう。だが、右翼日和見主義者、改良主義者たちのように、闘争を改良に限ることもなく、また改良によって労働者の経済的地位が確実に改善され、その生活が確実に保障されるなどというようなことを説くこともしない。かれらは、改良主義者の主張をひっくりかえし、改良主義者のごまかしを暴露して、資本主義のもとでの改良は、きまつて一時的、局部的であつて根本的なものではありえないこと、支配階級は必ず他方でなんらかの形でその「借り」を返さずにはいないことを説明し、この資本主義、つまり賃銀奴隷制の存続するかぎり、労働者の地位の根本的改善はありえないことをあきらかにし、この賃銀奴隷制を打倒するためにこそ経済的地位の改善をかちとり、これを正しく利用しなければならぬ、ということを主張する。

改良主義者、右翼日和見主義者は、改良の枠の中に労働者の闘争を制限し、闘争がこの枠をのりこえることを阻止して、賃銀奴隷制の維持・強化をはかるために、経済的地位の改善を主張するが、これにたいして、マルクス・レーニン主義者は、労働者の闘争が改良の枠をのりこえて賃銀奴隷制そのものの打倒のための闘争に拡大され強化されるために、経済的地位の改善をおしすすめる。ここに、改良についての、資本主義のもとでの労働者の経済的地位の改善についての、改良主義とマルクス・レーニン主義との根本的原則のちがいが、その「たたかう方」の根本的差異がある。そしてマルクス・レーニン主義者は、資本主義の革命的変革の立場に立つて、労働者にたいし、賃銀の本質、賃銀奴隷制の本質についての正確で徹底的な理解をえさせるように粘りづよい努力をかたむけなければならない、資本の

支配のつくるかぎり賃銀奴隸制は避けられないことをはつきりとつかませ、この賃銀奴隸制そのものを根本的に打倒して社会主義社会を創設する「担い手」としての労働者階級の歴史的使命を明確に把握させることを、なによりもまず心がけなければならないのであって、このような「真のマルクス主義的見地」に立っていつさいの闘争を積極的に指導することによって、はじめて労働者は、資本主義のもとの改良が一時的でなら重大なものでありえないことをつかみ、改良主義的指導者たちの巧言にまどわされることなく、その改善のためにたたかいながら、この改善を利用して賃銀奴隸制そのものにたいするいつそう粘りづよい闘争をおしすすめることができるようになる。このような「たたかい方」のうちにこそ、レーニンがくりかえし強調している「改良と革命との正しい関連づけ」が見出されるということができるのである。

このような「改良と革命との正しい関連づけ」を強調する「真のマルクス主義的見地」がどんなに決定的な意義をもつものであるかということは、最低賃銀制の問題についても、完全に妥当する。このことは、つぎの簡単な事実をかえりみてるだけでも、十分思い知られる。たとえば、最低賃銀制が古典的にきわめて完璧に実施されているといわれる「恵まれた」資本主義国オーストラリアをとってみるがいい。あるいは、最低賃銀制がよくととのっている「最賃制のおかげで労働者の生活の保障と向上がすすんでいる」として一部の「わが国のマルクス・レーニン主義者」がお手本として必ず推奨するアメリカ⁽¹⁾またはフランスをとってみるがいい。これらの国では、「最賃制の実施」のおかげで、賃銀労働者の経済的地位が根本的に改善され、その生活が確実に向上し保障されているだろうか？ いったい、これらの国では「最賃制」によって、どれだけ賃銀奴隸の地位からの解放がなしとげられたというのか？ そこでは、労働者階級の内部に根強く巣くっている右翼日和見主義、小ブル的修正主義や改良主義の優勢とあいまっ

て、「最賃制」その他による経済的地位の一時的改善は、かえって資本主義のもとでも労働者は——「民主的国家的民主的施策」のおかげで——「最低賃銀」を保証されてその経済的地位の向上、生活の保障が十分可能なのだとの考えを強め、賃銀奴隷制の打倒など全く考えようもしない無自覚な「満たされた奴隷」を多数つくりだすことによって、資本主義の維持＝強化に役立つものとなっているというのが、実状ではないか？　とりわけ第二次大戦後の全般的危機のいっそうの深化の時期において、社会主義圏内の労働者の地位の不断の向上という事実を目の前にひかえて、独占資本主義国内の賃銀労働者とその歴史的使命を自覚し賃銀奴隷制の打倒にたちあがるのを極力阻止せんがために、支配階級の側からすすんではんの些細な一時的譲歩があれこれおこなわれ、かくして労働者の地位の改善のためのさまざまな方策が、資本主義国家権力の手を通じて、資本主義体制維持のための「必要不可欠な道具立て」として整備され強化されざるをえないのであって、最賃制、失業保険、その他数多くの社会保障制度等々、いずれもみなしかりである。全世界的規模で展開されつつある賃銀奴隷制の全面的崩壊の危機を目前にして、独占資本主義国の支配階級がその支配の維持＝強化のための二つの道具——鞭と飴——をば、なおいっそう完璧に仕上げ、拡大し強化することを迫られているという、この歴史的法則の貫徹についてすこしも知らない「マルクス・レーニン主義者」など、いったい、ありうるだろうか？

- (1) 全世界にその「支配と強制」の網の目をはりめぐらし「毎秒数ドル」の最大限利潤をいたるところから搾りあげているアメリカ帝国主義の「指導者」、キューバ革命の圧殺をはかりヴェトナム侵略をはじめた故ケネディも、「最賃制の完全実施」の「貢献」によって、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の一人、塩田庄兵衛氏によって、つぎのような絶賛の言葉を贈られている。

「アメリカでは最低賃銀は一時間一・一五ドル

たとえば、アメリカでは、これまで最低賃銀は一時間一ドルときめられていた。すなわち、一日八時間労働すれば、日本円に

換算して二、八八〇円の賃銀は、どんな労働者でももらえる仕組みで、それ以下の賃銀は存在しないということである。ところが、ケネディ氏が大統領に就任するやいなや、最低賃銀を一・一五ドルに引き上げることを発表し、二年後には一・二五ドルにすると約束した。二年間に二五パーセントの所得増加である。今日、日本で八〇〇〇円以下の低賃銀労働者は五〇〇万人といわれている。最低賃銀制の運動は、日本の低賃銀構造を掘り崩すデモであり、日本から貧乏を追放するきめ手である」（塩田氏著『労働組合入門』、一九六一年五月、一七五ページ。ゴシック体―塩田氏、傍点―山本）。

「どんな労働者でも、アメリカ金融資本の代弁者ケネディ氏のおかげで、一日三、六〇〇円がもらえる」と、「労働問題」の『専門家』であるわが塩田氏は、「すばらしい労働者の楽園、アメリカ」を賞めちぎっていられるが、同じ一九六一年に日本の総評大会に出席したアメリカ電機労組代表ニクソン氏は、「アメリカでは現在、七〇〇万人（全労働者の一五パーセント）の失業者がおり、先週もニューヨークで千五百人もの婦人が洗濯婦の仕事を得るために三日間にわたって行列していた」という、生々しい事実の報告をおこなっている。

一介の労働者であるアメリカの一組合代表者が「賃銀奴隷にとつての地獄だ」とその実情を訴えている当のアメリカ独占資本主義国が、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の眼には「労働者の楽園」として映るとは、いったい、どうしたことであらうか？ その「地獄」の維持・強化に役立っている「最賃制」が、「貧乏を追放するきめ手」として映るとは、いったい、どうしたことであらうか？ 神氏のような「品性」をもった一部の「わが国のマルクス・レーニン主義者」は、その「品性」の故に、事実すらまともに「正視」できないのであらうか？

賃銀労働者が、改良主義の枠にとじこめられることなく、ただしく改良を利用してその階級闘争をおしすすめ、これを拡大強化していくためには、さきにみたように、賃銀労働者自身が、資本主義とはどういうものか、賃銀奴隷とはどういうものかということについての正確な理解をもつこと、つまりマルクス主義の根本思想をただしく把握していることがなによりも肝要であり、そこに、真の前衛党にとって「労働者階級の組織と意識を『革命に』むかって高揚させ整備する」ためにたたかい、「真のマルクス主義的見地に終始する」必要と義務が生ずるのは当然である。

すべて以上のことは真のマルクス・レーニン主義の見地からみれば、みな原則的なことであつて自明すぎるほどであるのに、こういったことが「全然わからない」と、「わが国のマルクス・レーニン主義者」、榊氏は告白していられるのである！ この「皆目無知」という氏の告白そのものが示している客観的事実は、つまりこういうことである。それは、榊氏のような「品性」をもつ一部の「わが国のマルクス・レーニン主義者」は、レーニンの教示する「改良と革命との正しい関連づけ」を全然守っておらず、したがって当然に、反レーニン主義的な改良主義、右翼日和見主義の見地を後生大事と守っているにちがいない、ということである。このことを、わたしは、つぎに簡単な事実をもつて示すことにしよう。

三

まず、つぎの引用をごらんいただきたい。

「最低賃銀制にふくまれるべき内容の基本についていえば、最低賃銀制とは、読んで字のごとく、賃銀の最低を法律によって保障するというものであり、その目的は、労働者の生活向上、労働者の生活保障を国家が与えるというものです。これはひいては、農産物価格にふくまれる自家労賃、および商工業者の税金控除額のなかにふくまれる自家労賃などの、基準になってくるのは当然で、農民商工業者自身の生活向上を意味していると同時に、また下請けの中小企業にすれば、下請け単価のなかで見つめられる労賃部分も、この最低賃銀制による額が基準になりますから、その経営内容、経営の保障にも役立つわけで、全体として日本人民の生活を維持向上させ保障させることになります。なおフランスの例を見てもわかるように、失業保険および家族手当をはじめとする、社会保障などの給付基準も、当然この最賃制によってきめられる最低金額をもとにして決定されることになるわけです。

もう一度くり返し、この基本を述べますと、最低賃銀制度を確立するというのは、日本人民全体の生活を保障し、向上させることを目的とする法律を制定するというのであります。これを労働者についていえば、ともかくも職について働く以上、これ以下の

賃銀で働かせることはできないということを制度として確立するわけです。」

「……この最低賃銀制確立の闘争は、労働者の積極的な要求を法律化しようというもので、しかも日本資本主義を維持し、発展させてきた一要因といわれる低賃銀体制を打ち破つていこうというのですから、いわば日本の資本主義を一部とはいえ、相当大きく変えることを意味しており、それを法律によって固定化しようというものです」(ゴシック体—山本、賃金はすべて賃銀と訂正)。

みられるように、ここには、独占資本のにぎるブルジョア国家権力の手で——法律によって——「固定化」される最低賃銀制——つまり、半飢餓的最低賃銀の法制化——が、労働者の経済的地位を向上させ、その生活を保障するというだけではなく、農民、商工業者、中小企業にまでその経営の保障をあたえるし、さらにすすんで日本人民全体の生活の保障と向上を絶対確実にするばかりでなく、なんと、それによって日本資本主義の一部までが相当大きく変革されるのだ、という主張が、この上もなく明確にうちだされている。最低賃銀制は、職にありついでいない労働者はそのままに捨てておき、しかもその実施によって経営の合理化を迫られる中小企業では就業労働者を減らすために失業者をむしろ増大させる結果を招くものであるが、なお、当の就業労働者にたいしては労働力の維持・再生産に必要な額をはるかに下回る半飢餓的賃銀を国家——資本家国家——が保障するという形になっているために、国家がいかに労働者の経済的地位の改善を真剣におしすすめているような外観をつくりだす。それゆえ、この制度は、中小企業の経営困難、失業増加、増税、物価引上げ等々によって、労働者の経済的地位の改良の効果をいちじるしく減殺するものでありながら、しかも、これによって独占資本主義のもとでも「労働者の生活の保障と向上」が可能であつて、資本家国家がそのために尽力してくれるという観念を労働者に植えつけ、その観念を強固なものにすることに役立つのであつて、そのために労働者の賃銀奴隸制にたいする不満、反抗および階級的自覚が鈍らされ眠りこまされ、

賃銀奴隸制の、したがってまた独占資本による人民全体の「支配と強制」の体制の、維持・強化に役立たせられることになる。そして、支配階級とその代弁者たる政党指導者や組合幹部たちは、右のようなものとして最低賃銀制のありがたさを説明してまわっているのである。ところが、ここに現われた前衛党の「指導者」は、神氏とまったく同じ「立場」にたつて、この最低賃銀制が、独占資本主義のもとでもりつばに労働者の生活を保障し、向上させるものである——諸君、よくききたまえ、生活の保障、生活の向上だそうである——ばかりでなく、さらにひろく農民や工業者や中小企業までもの経営がりつばに採算がとれて豊かに営まれるように保障してくれる——諸君、よくききたまえ、経営の保障だそうである——ばかりでなく、なんと日本人民全体の生活を保障する——諸君、おどろくなかれ、日本人民全体の生活の保障だそうである！ 独占資本も健在、日本人民全体の生活も首尾よく保障されるという、世にもありがたい資本家国家！ このすばらしい楽園をどうしてわざわざ犠牲をはらって変革することがいろうか？！——ことができるし、おまけに日本資本主義そのものの一部までがこれで相当大きく変革されることになる、という主張を公然とかかげているのである。神氏と同じ「品性」の持主たちは、あとでみられるように「わが国の構造改革論」者をば——何とかの一つ覚え式に——たったひとつの「理由」で、つまりそれが「なしくずし革命論」を唱えているという「理窟」で、非難攻撃しているが、同じ論法をもってすれば、右にあげた「指導者」の主張などは、「なしくずし」どころか、まさに「ひとりでに革命論」であつて、「わが国の構造改革論」者のそれをはるかに上廻る、真正正銘の構造改革論といわなければならない。「わが国の構造改革論」者たちは、「イタリーの道」をそのままとつて「控え目」に、「最賃制の実施」が「独占の搾取を制限する」ものだとして述べているのになんて、この「指導者」は、その「最賃制の実施」がそのまま「日本人民全体の生活の保障と向上」をもたらし、「日本資本主義そのものの部分的変革」であると主張してい

るのである！　このようなまぎれもない改良主義的、修正主義的見地からみれば、「改良と革命との正しい関連づけ」というレーニンの教示などきれいさっぱり忘れてしまい、「労働者階級の組織と意識とを『革命』にむかって高揚させ整備することに全力を傾けていっさいの闘争」を、したがって「改良闘争」をも「指導」しなければならぬとする「マルクス主義的見地」という明確な文字を見ても、その意味がわからず、「これは、いったい、何を意味するだろうか？」という、卒直な叫び声を出さないではいられなくなるのも、理の当然というべきなのである。

ここに一例としてあげた「指導者」とは、日本共産党中央委員の要職にあって「労働運動、労働問題」の「専門家」と称される高原晋一氏であって、右に述べたような「ひとり、で、革命論」が展開されているのは、高原氏がとくに労働者向けに著わされた『賃金闘争』（一九六一年一月、新日本出版社）の中であるが、なお、読者の誤解をさけるために、高原氏が「日本人民全体の生活を保障し向上させる」もの、「日本資本主義そのものの一部を大きく変革する」ものとして推奨される最低賃銀制が「最低」として法律的に規制する賃銀の額をいくらと指定していられるかを、お伝えしておく必要がある。わが国の最低賃銀制のとるべき金額は、高原氏によれば、一九五八年には、なんと、一万一千円が妥当であって、これは日本共産党も発表している数字だとのことである（前出、八八ページ参照）。高原氏はまた、同じ著書の他の箇所では——この一万一千円では少々お粗末にすぎると感じられたものか、——日本共産党の数字とはちがって、一万四千元を「最低においていいと思う」と言明していられる（前出、一〇〇ページ参照）。

人間一人の最低生活費が一万円といわれたそのときに、標準家族の最低生活費のなんと三分の一にもおよばない半飢餓的最低賃銀、一万四千元！　それも、ありがたいことに職にありついただけ、資本家国家が保障して下さる一万四千元！　日本人民全体の生活を保障し向上させ、日本資本主義の一部を大巾に変革するところの、この一万四千元

！ なんと、最大限利潤でふくれあがった独占資本のふところにとってこの上もない慰安をそそぐ福音であろうか！
そしてまた、うちひしがれた賃銀奴隷のよるべき魂にとつて、なんと心あたまる救いの啓示であろうか！ この
ような福音、啓示をさしおいて、それ以上に創造的なマルクス・レーニン主義の修正が、その「構造改革」的歪曲
が、いったい、あるだろうか？⁽²⁾ そして、同じ修正、同じ歪曲を中味とする同じ「構造改革論」者でありながら、そ
の一方の他方にたいする非難、攻撃の、なんと手きびしく、峻烈であることか！

(2) 高原氏の著書『賃金闘争』の内容についての詳細な検討、とくにその修正主義的本質についての究明は、その刊行直後に発
表した拙論、「賃銀論はいかにあるべきか？——修正主義的諸偏向の克服のために——」(一九六一年六月および十月、『立
教経済学研究』第十五卷第一号および第二号所載)のなかでおこなわれているので、参照されたい。なお、そこに示されている
「自然発生性への屈従と拝跪」については、行論でも論及されるはずである。

四

つぎに、「ブルジョア〔的な——山本〕『労働評価』や『同一労働・同一賃銀』という文句にうつろう。

わたしは、拙著の終章「総括」の中で、「構造改革論」の独特な思考方法の根底にあるものが「プロレタリアートの
歴史的役割」についての理解の完全な欠如であるということを指摘し、この「プロレタリアートの歴史的役割」の正
確で徹底的な理解こそが決定的に重要だと強調しているのであるが、これと関連して、つぎの二点、つまり、「第一
に、科学的経済理論をたたく把握することが決定的に重要であるが、しかしまたそれはきわめて困難だということ、
第二に、階級意識を身につけることが同じく決定的に重要であり、しかもそれがきわめて困難だということ」を力説
し、この二点に注をつけて、つぎのように述べている。

「ここでは、そのほんの一例として、賃銀問題をあげておこう。賃銀ひとつをとっても、科学的経済理論にもづいてその内容を正しく説明したものは、ほとんど見あたらない。先進的理論家の大半は、ブルジョア的な『労働評価』や『同一労働・同一賃銀』をふりまわしている始末である。これでは階級意識をうえつけることはおろか、これを曖昧にし、骨抜きにするだけである」(三二ページ)。

櫛氏は、この中の「先進的な理論家の大半は、……始末である」という箇所をぬきだして、これを「きわめて『勇しい』ことばのかげに危険なドグマが目立つ」絶好の例だとして、「これはいったい何を意味するであろうか？」という、非難と侮蔑の言葉を投げつけていられる。そこで、以下において、「労働評価」や「同一労働・同一賃銀」がどのような性格のものを明らかにしておきたいと思う。

一見してすぐわかるように、「労働評価」と「同一労働・同一賃銀」とは、別々のものではなく、むしろ同じ内容の主張を異なって表現したものといえる。というのは、「労働評価」とは、「労働の質と量」を「評価」するということで、この「評価」にしたがって「労働」が支払われなければならないという主張が基本となっているものであり、「労働の質と量と応じての賃銀」が正しいのだという主張にたてば、一方では、その「労働」を「評価」する必要が生ずると同時に、他方では、当然その「評価」にしたがう以上、「同じ労働」は「同じ賃銀」を支払われるべきだという主張が導き出されざるをえないからである。そして、事実についてみて、「同一労働・同一賃銀」を主張する「先進的理論家」は、例外なくその全部が「労働評価」の主張者となっているのであって、また逆に、「労働評価」を唱える論者はかならず「同一労働・同一賃銀」論者になっているのである。そこで、まず、「先進的な理論家の大半」が、どんなに積極的に「労働評価」や「同一労働・同一賃銀」を主張したり支持したりしているかというを示すために、二、三の実例をあげてみよう。

(その一) 舟橋尚道氏の主張

「私が従来⁽³⁾の論文において第一に強調したことは、賃銀は本来的には労働力の価値の貨幣的形態であるが、しかし資本家が労働力を買うのは、それが一定の労働時間の対象化であるからではなく、資本家にとって使用価値があるからだという点であった。このことはマルクスが『物が無用であれば、それに含まれている労働もまた無用であり、労働としては計算にはいらず、従って何らの価値も形成しない』⁽⁴⁾と言っていることでも明らかのように価値論の常識に属することだ⁽⁵⁾だったのである。しかしわが国の従来の賃銀理論においてはこの点が必ずしも明確ではなかった。第二に強調したことは、労働力の資本家にとっての使用価値は、価値を生産するという⁽⁶⁾ことにあり、この点が他の商品とは異なる労働力の特殊性の一つだということである。労働力の使用価値のこのような特殊性(いかなる具体的・有⁽⁵⁾的労働といえども、抽象的・人間的労働という属性においては価値を形成するという特殊性)にもとづいて、労働力の使用価値は、他の商品とは異な⁽⁶⁾って通約性(Kommensurabilität)をもつことになり、したがって労働力の使用価値自体が評価可能なものになる」(舟橋氏論文、「労働の価格法則再論」黒川俊雄氏の反論に答える)、『経済評論』一九五九年五月号、一一八ページ)。

(3) 「賃銀は本来的には労働力の価値の貨幣的形態である」という主張は、まったくの誤りである。なぜならば、「労働力の価値の貨幣的形態」というのは、要するに「労働力の価値を貨幣で表現したもの」、つまり「労働力の価格」ということにほかならないが、労働賃銀は、この「労働力の価格」がまさに「労働の価格」に転形したものであって、この転化した形態という点こそ労働賃銀の本質が存するからである。

(4) 「資本家が労働力を買うのは、それが資本家にとって使用価値があるからだ」という主張には、格別異論をさしはさむ余地はないが、しかし、「このこと」は、舟橋氏の強調されるように「価値論の常識に属する」といったものではけ⁽³⁾つてない。それは、まさに労働論の領域の問題であつて、しかも、「労働論の常識」からい⁽⁴⁾え⁽⁵⁾ば、資本家は、労働力を買うのではなく、労働を買うものとされているのである。舟橋氏は、マルクスの「物が無用であれば、それに含まれている労働もまた無用であり、労働としては計算にはいらず、従って何らの価値も形成しない」という文章を引用して、これによつて「明らか」だというように説明されるが、このマルクスの文章は、舟橋氏のいわれる「このこと」とはまったく関係のないものである。それは、経済学のと⁽⁶⁾りあつかうものが、社会の存続を支える社会的生産物であり、また、社会の存続を支える生産物を生産する労働、つまり社会的

労働であるという、経済学の本来の対象にかかわる規定から導き出される当然の結論であって、マルクスは、この文章を据えることによって、右の規定を明確にすると同時に、「物が無用であれば」を拡大解釈して「物が売れなければ、その商品の価値は下る」とか、「買手にとつての使用価値の度合で価値がきまる」とかいったような、俗物的な効用価値説をあらかじめ封じているものである。それゆえ、この文章は、むしろ、舟橋氏の強論される「価値論のブルジョアの常識」を全面的に覆えしているものといわなければならない。

(5) 「価値を生産する」という点に「労働力」商品の特殊性の一つを認めると言われるのは、正しいものとはいえない。「価値を生産するばかりでなく、それ自身の価値よりも大きい価値をつくりだす」という点にこそ、「労働力」商品の特殊性の一つ」が、しかもその最重要な「特殊性」が存するのである。この肝腎の点を見失って、ただ「価値を生産する」ということだけを認めるならば、剰余価値生産というものはその視野から完全に消え失せてしまい、賃銀奴隷の本質をたたく把握することとは、絶対に不可能となる。

(6) 「どんな具体的・有用の労働といえども、抽象的・人間的労働という属性において価値を形成する」という氏の命題は、誤りである。第一に、それは、労働と価値とを混同している。抽象的・人間的労働は、対象化した形態においてのみ価値を形成する。第二に、それが対象化する当の生産物は、他人のための使用価値をもつ社会的生産物でなければ、価値は形成されない。資本主義社会には、価値をつくりださない労働が実におびただしくあるのであって、これらの不生産的労働にたいしては、ならぬ価値を形成しないにもかかわらず、買手＝資本家によって賃銀が支払われているのである。買手＝資本家にとつての「使用価値」とは、一面においては「特定の、具体的・有用の労働」であり、他面においてはその「具体的・有用の労働」を通じて、「利潤」を取得することである。このばあいの「利潤」は、それが生産的部面での生産的労働であるときには「抽象的・人間的労働という属性において形成した価値」のうちから生ずるが、そうでないときには、他のところで生産された剰余価値の配分にあづかっただけである。

舟橋氏は、「労働力の使用価値」を「価値をつくりだす」ことのみに限定して、「価値をつくりだす」ものとしては、等質であつて量的にちがうだけであるという奇妙な論理をもつて、そこに「他の商品とは異なった通約性」があるのだと主張され、ここから「労働力の使用価値自体が評価可能なもの」になるとの結論をひきだしてこられる。つ

まり、簡単にいえば、「どれだけ価値をつくりだすか」という、「価値の分量」が「評価できる」ということである。そして、この「どれだけ価値をつくりだすか」というその「価値の分量」が「評価できれ」ば、その労働力の特殊の使用価値が算定されたわけであるから、その「評価」にしたがって賃銀が当然支払われるべきである、ということになるのである。

このようにして、舟橋氏の主張されるところをはっきり並べてみるだけで、その根本的欠陥はただちにあきらかになる。舟橋氏は、右のような議論の進め方自体のうちに、マルクス「価値論の常識」をすっかり見落してしまふ危険があることに気づかれないようである。その「価値論の常識」の第一は、「一商品の価値は、その生産に社会的に必要な労働時間によつてきまる」という、価値法則そのものである。一商品の使用価値がその買手にとって大きかろうと小さかろうと、はたまた、それが買手のために「価値をつくりだす」と「つくりださない」とにかかわらず、その商品の価値は、それ自身の生産に要する労働量によつてきまるのである。第二は、マルクスの有名な基本的命題——「労働そのものはなんらの価値をもたない」である。第三は、「労働力の使用価値」は「労働力の流動」そのもの、労働そのものであって、人間的労働力の支出たる労働は二面をもつということ、抽象的・人間的労働は、つねに具体的・有目的労働の形態のもとのみおこなわれ、具体的・有目的労働の中にのみ存在しうるが、それが労働生産物に対象化して商品価値を形成するのは、私的所有の社会でのみ、しかもその生産物が他人のための使用価値をもつ場合だけだ、ということである。このように、その具体的・有目的労働によつて特定の「形態変化」がおこなわれ、一定の使用価値が生産されたばあいだけ、抽象的・人間的労働がその生産物＝商品の価値を形成するという点を考えれば、「労働力の使用価値」において第一に決定的意義をもつのは、むしろ具体的・有目的労働の面であつて、そこ

で他の一面の抽象的・人間的労働が対象化する可否かは、第二義的な意味しかもたないことは、明らかである。

五

(その二) 宮川実氏の主張。

宮川氏がことさら「労働者向け」に書いたといわれる著書『賃金』は、いみじくも「賃上げはなぜ可能か」という副題がつけられている。賃金の説明は、なぜそれが劣悪なのか、「賃上げ」ではたして労働者の経済的地位の根本的改善ができるかということを追究し、賃銀奴隷制の暴露に焦点を合せておこなわれなければならないのに、そういう説明はいっさいぬきで、ここでは、なんと「賃上げは可能だ」という、労働者のふところと心とをよろこばせる答えを引き出すことに重点がおかれている。右の副題は、典型的な改良主義的おしゃべり、修正主義的主張を端的にあらわすものでしかないが、実際の内容についてすこしくその検証をこころみてみよう。

宮川氏は、「同じ質の労働力の価値は同じである」という表題をつけた一節の中で、「労働者階級が主張する『同一労働同一賃銀』の原則は、いったい、どんな内容のものか」と述べ、これにたいしてこう説明される。

「第一に、労働力の価値は、したがってそれを貨幣で表わした労働力の価格は、その労働力が熟練労働力であるか未熟練労働力であるかによって、その大きさがちがっています。逆に云えば、同じ質の労働力の価値(したがって価格は、同じ大きさです。なぜというに、同じ質の労働力を生産するためにその社会が必要とする労働の分量は、同じだからです。もちろん、こんにちでは、労働力の価格(賃銀)は労働力の価値よりもはるかに下に押し下げられています。しかし、下がったなら下がった水準で、同じ質の労働力の価格は同じであるべきです。」(一一一—一二ページ、傍点—山本)。

商品の価値の大きさは、その商品を「生産するために社会が必要とする労働の分量」できまる。だから、右のよう

に、なぜ同じ質の商品の価値が同じ大きさとたずねて、「それを生産するために社会が必要とする労働の分量が同じだから」と答えるのは、まったく子供だましのトオトロギーではない。氏は、はじめに「労働力の価格」は「労働力の価値を貨幣で表わした」ものと明確に述べられながら、あとでは、同じ「労働力の価格」という言葉を用いて、それが「労働力の価値よりもはるかに下に押し下げられています」と言って、この「労働力の価格」を「賃銀」にすりかえてしまわれる。このように「労働力の価値の貨幣的表現」を「賃銀」と同じものだとするのは、「賃銀」が「労働力の価格」とはかけはなれた「もつとも不合理な形態」であることの説明をその主たる課題のひとつとしている『資本論』の立場を完全に捨てて、マルクスが論破してやまなかった当の俗物的弁護論の見地に立っていることを自ら示すものといわなければならない。この俗物的弁護論の見地は、「下がったなら下がった水準で、同じ質の労働力の価格は同じであるべきです」という、まさに資本家にとって願ったり叶ったりの主張にはつきりうちだされている。同じく日価値三千円の労働力商品種類が二つあるとして、その一方の「労働力の価格（賃銀）」が「押し下げられ」て二千円の「水準」になったならば、他方の「労働力の価格（賃銀）」も、当然「同じであるべき」で、同じ「水準」の二千円になるべきだ、という「原則」ほど、資本家にとってよろこばしい「マルクスの原則」はないが、これが、なんと、「労働者階級の主張する『同一労働同一賃銀』の原則」だとしていっているのである！

(7) ここで宮川氏は、「資本家の主張する『同一労働同一賃銀』という言葉をもちだして、こう説明される。

「資本家は、労働者によって新しくつくりだされた価値総額のうち、まず、最大の利潤をとって、その残りを労働者に賃銀総額としてあたえ、こうして労働者に賃銀総額としてあたえたものを、『同一労働同一賃銀』の原則にしたがって労働者たちのあいだに分配しようとするのです」(一六ページ、傍点―山本)。「資本家の『同一労働同一賃銀』の原則は、資本家がまず、最大の利潤を差し引いた残りを労働者のあいだに分配する原則、労働者たちの受けとる賃銀の相対的割合をきめる原則、資本家が

きめた賃銀総額のなかのどれだけを個々の労働者がうけとるかをきめる原則です。資本家の『同一労働同一賃銀』の原則は、資本家と労働者との関係の問題を、労働者と労働者との関係の問題に巧みにすりかえたものです」(一七ページ、ゴシック体―宮川氏、傍点―山本)。

さきに「同じ水準に押し上げられるべきである」という「革命的福音」を授けられてよこんだ資本家たちも、ここでの「まず最大限の利潤をとってその残りを労働者のあいだに分ける」という、超俗物的主張をきいては、首をかしげないわけにはいかない。宮川氏は、これによって、費用というひとつの言葉の意味すら全然理解していないことを告白されているのである。「まず最大限利潤を差し引いて、その残りを賃銀総額として労働者に与える」などというようなことをかりにも考えたことがある資本家が、ひとりでもいるだろうか？ 宮川氏は、「まず最大限利潤を差し引いて」などとまことしやかに言われるが、いったい、なにかから、「最大限利潤」を差し引くといわれるのか、まずはっきり説明されるがいい。つぎには、その「差し引く」べき「最大限利潤」の額はどうしてきめられるのか、はっきり説明されたい。賃銀総額はいうまでもなく費用の中の主要な一項目であるが、およそ「利潤」がさきにきまってそれを「差し引いて」残りが「費用」としてきまるなどというようなタワゴトが、真面目にとりあげられるだろうか？ また、氏はさももつともらしく、ゴシック体までつかって、「労働者と労働者との関係の問題に巧みにすりかえたものです」などと言われるが、問題は「同一労働」にたいする「同一賃銀」である以上、当然に「一労働者の労働と他の労働者の労働との関係の問題」にならざるをえない。「同一」の問題は、まさに「労働者と労働者との問題」であって、ここにこそ「同一労働同一賃銀」論の危険な反革命性がひそんでいるのである。「巧みにすりかえた」のは、ほかならぬ宮川氏であって、氏は、「同一労働同一賃銀」という、賃銀(＝費用)にかんする資本家的原則を、「最大限利潤の控除」というで、たがひの原則にすりかえられたものである。

「同じ質の労働力の価値は同じである」ということは、言葉そのものとしては一応成り立つ。だが、「労働力の質」とその「価値」とは、どのようにして結びつけられるか？ 宮川氏は、「労働力の質の差は労働の質の差で示される」と題する節の中でこう説明される。

「それでは、労働力が同じ質の労働力であるかどうかを、どうして知ることができるか。労働者たちが労働力を發揮して同じ質

正しい批判はいかにあるべきか

の労働をするばあいには、かれらの労働力は同じ質の労働力であることを知ることができます。つまり、労働の質が同じであるということは、労働力の質が同じであることを示す指標です。しかも唯一の指標です。われわれは、それよりほかには、労働力の質の差をあらわす指標をもっていないのです（一二—一三ページ、ゴシック体―宮川氏）。

「労働力の質」が同じであれば、その「労働力の支出」である「労働」の質も同じであるはずである。だが、その逆に、現にしている「労働の質」が同じであるからといって、それらの「労働力の質」が同じだとはけっしていえない。「労働力の支出」つまり「労働」は、資本家の指図どおりにおこなわれるのであって、そのために「労働の質」は、資本家の思い通りのものに、つまり高いものにも低いものにもきめられる。大学卒Aと中学卒Bとの二人が雇われて、同じ帳簿をつける労働をする場合、「労働の質」が同じだからといって、AとBとの「労働力の質」は同じである、と断定できるだろうか？ この場合、資本家は、宮川氏の「労働者階級の主張する『同一労働同一賃銀』の原則」を欣然として守って、Aの賃銀を引き下げてBの賃銀と同一にするであろう。これはまた、宮川氏のさきの「下がったなら下がった水準で、同じであるべきです」という御託宣にも忠実に副うゆえんである。

ところで、宮川氏は「労働の質」という言葉をさかんにくりかえされるが、いったい、このばあいの「労働」とは、どんな労働か、それは「具体的労働」か、それとも「抽象的労働」か？ そのどちらをとるにせよ、いったい、どうやってその「質」を比較することができるか？ また、かりにその「質」が比較でき計算できるとしても、その「質」と「賃銀の高さ、水準」とは、どのようにして結びつけられるというのか？ 労働の「質」と「価値量」とのあいだには全くなんの関係もないという「マルクス価値論の常識」をひっくりかえしたこういう主張をかかげるとは、なんとすぐれた「品性」の「マルクス主義的」⁽⁸⁾経済学者であらうか！

(8) こういう「品性」の経済学者がどんな「マルクス主義的」労働者教育をしているかを如実に示すほんの一例として、同じ氏の著書の中からつぎの箇所をあげてみよう。

「経済闘争(その中心は賃銀闘争である)と政治闘争との関係については、つぎの諸点をしつかりつかんでおくことが必要です。第一に、政府に工場法や衛生法をつくらせたり、最低賃銀法や社会保障法をつくらせたりする運動は、政治闘争ではないということです。これらの運動は、資本主義国家を前提し、これに労働者の要求をだす闘争ですから、経済闘争つまり資本主義制度のもとで労働条件と生活条件とを改善するための闘争であるにすぎません。政治闘争とは、資本主義国家そのものを打倒するための闘争、政治権力を資本家階級の手から労働者階級の手に奪取するための闘争です。」

第二に、経済闘争は政治闘争の学校です。労働者階級は、じぶんの経済的狀態が直接にかつ直ちに改善されるのでなければ、世の中がよくなったとは思いません。労働者の経済狀態も改善されるというので、労働者大衆は運動にひきこまれ、精力的にそれに参加し、英雄的行動と自己犠牲と偉大な事業にたいする献身とを発揮するのです。労働者の生活条件はひじょうに悪いのですから、事態はそうせざるをえないのです」(一五七—一五八ページ、ゴシック体および傍点—山本)。

みられるとおり、宮川氏の超マルクス主義的主張の精華がいかなくここに展開されている。第一に、工場法その他の法律をつくらせるための闘争は政治闘争ではないという、完全無欠な錯乱。第二に、資本主義国家そのものを打倒するための闘争だけが政治闘争だという、左翼日和見的な超革命論。第三に、労働者はその経済的狀態が直接にかつ直ちに改善されるというので運動にひきこまれるのだという、典型的な物質至上主義の改良主義的主張。第四に、労働者の生活条件がひじょうに悪いから、その直接かつ直ちの改善をめざして、労働者が運動にひきこまれるのだという、超マルクス主義的「窮乏革命」論。第五に、労働者は、経済的狀態が直接にかつ直ちに改善されることで運動に引きこまれるのだと言いがら、その労働者が自己犠牲や献身を発揮するなどという、全く矛盾した主張をにかけて平気でいられるという、おどろくべき論理的錯乱と煽動政治屋的だばら。

(その四) 高原普一氏の主張。

「……わたしたちは、賃銀闘争の発展方向の中心にこの課題〔最低賃銀制度の確立—山本〕をはつきりすえなければなりません。そして、その賃銀内容についていえば、だれでも知っている『同一労働同一賃銀の原則』と『労働の量と質に応じた賃銀の原則』があるのはいうまでもありません」(前出、六八ページ、ゴシック体—高原氏)。

正しい批判はいかにあるべきか

「……わたしは、むしろ、『労働の量と質に応じた賃銀』と『同一労働同一賃銀』という二つのスローガンと、これが要求として労働者から出てきた歴史とを考慮して、これはマルクスのいう賃銀論から考える理論上のものというよりは、労働者の卒直な要求で、『同じ値打ちの仕事には同じ賃銀を払え』⁽⁹⁾ということだと考えてよいと思います。しいていえば、わたしは賃銀論に正しくあてはめるとすれば、どちらかといえば、賃銀の根本である労働力を、実際に比較できる労働内容であらわしている意味の労働とるのがよいと思います」(前出、一二八ページ、傍点―山本)。

(9) 高原氏は「労働者の卒直な要求」といわれるが、これは典型的な小ブル的要求である。マルクスの著『賃銀、価格および利潤』の結びの有名な文章——『公正な一日分の労働にたいして公正な一日分の賃銀！』という保守的なスローガンのかわりに、これらの旗じるしの上に、『賃銀制度の廃止！』という革命的なスローガンを書きしるべきである。』——を飾りとして、かかげる論者は、高原氏、宮川氏など枚挙にいとまがないが、それらの人々がいずれも、同時に「労働の質と量に応じた賃銀」とか「同一労働同一賃銀」とかいうスローガンを懸命に説いているのは、まことに珍妙というのほかない。というのは、「公正な一日分の労働にたいして公正な一日分の賃銀！」は、歴史的にりっぱに進歩的役割を果たした(また、現在も果しうる)スローガンであるが、「労働の質と量に応じた賃銀」などというのは、これとはくらべものにならない、まったく鼻もちなぬ反動的スローガンであるからである。

六

以上によってみても、わが国の先進的理論家や「わが国のマルクス・レーニン主義者」の大半が「労働の質と量に応じた賃銀」、「同一労働・同一賃銀」を主張していることは明白である。これらの「原則」がどんなに「ブルジョア的」で「反動的」なものであるかは、二、三の初步的質問を提起するだけであきらかとなる。

高原氏や榊氏などは、異口同音に「労働の質と量に応じた賃銀」という「勇ましい」スローガンをかかげていられる。よろしい、ではひとつおききしよう。その「労働」というのは、いったい、どういう労働であるのか、具体的労働

働か、それとも抽象的労働か？ 「労働」をあこれ論じたてている「わが国のマルクス・レーニン主義者」が揃いもそろってマルクス経済学の礎石である「労働の二面性」にすこしもふれず、頬っかむりの「労働」で事をすましているのは、その「品性」のいたすところとはいえ、情ないかぎりである。いまからでもおそくはない、『資本論』（第一章第一節）を読んで、はっきりと答えたまえ。どちらの「労働」であるか？

この質問に答えられないであろう高原氏や榊氏は、残念ながらマルクス主義者として完全に落第ものだが、また、どのように答えられたとしても、同じく完全に落第である。「抽象的労働」だと答えられるか？ ではおききするが、各人の「抽象的労働」の「質と量」とを、どうやってはかるというのか？ それとも、「具体的労働」だと答えられるか？ ではおききするが、それぞれ質を異にした特定の形態の有用的労働について、どうやって「質と量」とを比較計算するというのか？

「どういう労働か？」という質問には、絶対に答えることはできない。ということは、諸君はわけわからずにやらと知りもしない「労働」をふりまわしている、ということである。第一問はみごと落第だが、もっとむずかしい第二問がひかえている。かりに百歩ゆづって、「労働の質と量」が計算できたとしても、賃銀とどう結びつけるか？ ある一定の「質と量の労働」にたいして、どういう一定額の貨幣が対応するというのか？ 「労働」と「貨幣」とを結びつけるとは、またなんとたいした俗物的「マルクス主義者」であろうか！

右の二問を出すだけで諸君の超マルクスの水準は明確になるが、さらに第三問を出すことによって、諸君の脳中の完全なブルジョアの観念が動かしがたく検出される。さきの二問が片づいたものとして、たとえばある労働者の一日分の「労働」の価値が三〇〇〇円と計算されたとき、その労働者の日賃銀は、いったい、いくらが正しいというのか？

日賃銀は三〇〇〇円が正しい、といわれるか？　これが諸君の答えられる最善のところであろう。だが、労働者が資本家にたいして一日に三〇〇〇円の労働、つまり仕事をしてやり、賃銀として三〇〇〇円を受けとるとすれば、いい、資本家はどうかやって生きていくというのか？　これでは搾取どころか、資本も資本家も消えてなくならねばならない。資本や資本家を消さないとすれば、日賃銀は、たとえば二〇〇〇円とか一五〇〇〇円に切下げられねばならぬ。では、この二〇〇〇円ないし一五〇〇〇円の日賃銀をもって「労働の質と量に応じた賃銀」、つまり「三〇〇〇円の労働に応じた賃銀」といわれるか？　なんと資本家にとって心強い賃銀原則であろうか！

「労働」の「質と量」は、さきにみたように絶対に価値計算はできないのであるから、賃銀一五〇〇円でも、「労働の質と量」が一五〇〇円である労働に対応したものとこじつけることができる。この「労働」を「価値」に、しかも思いきり低い「価値」に結びつけるという手品を果すためにつくりだされたものが、各種の精巧な「労働評価表」である。資本家はこの「評価表」に照らして一五〇〇円、一三〇〇円と切下げ、しかもこれは「労働の質と量に正確に、応じた賃銀」だと主張する。「同一」というと「民主的」で聞えはよいが、商品の売手が同一の商品に同一の価格を要求するのは当り前で、買手たる資本家にとってはこんな要求は痛くも痒くもない。一日二〇〇〇円でも同一、五〇〇円でも同一である。肝腎なのは、買手になりたいして、いくらいくらよこせとその金額を明示して要求することである。「同じだけよこせ」などという売手があるのか？　「同一労働同一賃銀」の要求は、男女別、臨時工本工別、または人種別等の差別賃銀にたいしてのみ、一定の範囲内で正当なものであり、また存在理由をもちうるが、これを賃銀闘争一般にあてはめることは、ブルジョア的『労働評価』の尻馬に乗るだけのことである。⁽¹⁰⁾

(10) この点のたचितった論究については、拙著『労働賃銀』の第九章「公正な賃銀——同一労働同一賃銀」論について「およ

び前出拙論、「賃銀論はいかにあるべきか?」の「四、『同一労働同一賃銀』論の修正主義的性格」を参照されたい。

右にあげた三つの問いに全く答えることができないという事実の理論的意義は、こうである。つまり、御両君とも、労賃とはなにか?という、もつとも基本的なことが全然おわかりになっていない。マルクスは、『資本論』第一巻第六篇をば「労賃」と題して労賃形態の必然性・不合理性を解明しているのだが、このことは御両君の念頭から完全にぬけてしまっている。マルクス価値論の基本もマルクス労賃論の基本もみなすつかりぬけてしまつては、そのかわりに御両君の頭脳を埋めているものとしては、マルクスの断片的な語句のよせあつめと賃銀についてのブルジョア的な粗雑な俗物観念ばかりということにならざるをえない。「労働評価」などというのは、「労働」および賃銀についての歪められたブルジョアの観念を裏付けるための見せかけの「操作」であつて、賃銀を労働力の価値よりはるから下の水準に切り下げるための恰好の口実を提供するという役割しか果しえないものである⁽¹¹⁾。

(11) それでもなお、榊氏が「ブルジョア的な労働評価」というわたしの言葉を「教条主義的」として非難されるのであれば、どうぞ「プロレタリア的な労働評価」をひとつ示していただきたい。わたしひとりでなく、日本人民全体のために、どうか一日も早く「プロレタリア的な労働評価」を発表してくれたまえ。

さきにみたように、榊氏は、「最低賃銀制」という、「経済的改良」の問題にかんしては、改良主義者と全く同じ見地に立つものだということを卒直に表明されているが、ここではまた、「マルクス主義の主要内容」たる経済理論の基本的諸命題についての完全無欠な無知、価値・価格および賃銀についてのブルジョア的な粗雑な観念への執着という事実を、公然と表明されているわけである。こういう事実を前にして、良心的な読者が、つぎのような深刻な疑惑を禁じえないのは、けだし当然というべきであらう、——榊氏は「わが国のマルクス・レーニン主義者」で「評論

正しい批判はいかにあるべきか

六〇

家」だと称していられるが、いったい、「わが国のマルクス・レーニン主義者」と自称する一部の人々は、どういう「マルクス・レーニン主義者」なのか、そしてまた、榊氏はなにを「評論」する専門家であるのか？ と。

(一九六七・五・五)

×

×

×

×

×

×

さきに発表した本論稿の(一)にたいして、榊氏は、前回と同じく『学生新聞』(八月三十日付)をつかって、「拙劣な議論はどんな実効をもつか」という題の反駁論文を公表された。この論文は、榊氏の論じ方や「品性」についての特徴を突によく示したもので、当面の議論にとって大変貴重な材料となるものである。つぎにその要点をかかげて、多少の注釈をつけておきたい。

一 まず、「公然たる党攻撃の歩み」と題した(一)で、氏はこう云われる。

「二カ月はど前、わたしは山本氏のこの論文……を……読んでいたのであるが、内容は重大な性格をもっているものの水準が、あまりにも低いので、ことさらに取りあげるまでもあるまいと考えていた。ところが、立教大学関係だけでなく、氏の出講されている愛知大学、知友関係その他に山本氏の論文が抜刷で頒布され、一部の対外盲従分子にも利用されていることを聴くにいった。それ以前からわれわれは、山本氏が教壇からしばしば、日本共産党の幹部を名指しで中傷したり、党のひぼうをおこなっていること(一例をひけば、「共産党の賃上げは改良主義だ」……等々)は、伝えきいていた。

これらを考えあわせると、山本氏の新しい論文を黙過しておくのは不適當のようである。」

氏の言い分はしごくはつきりしている。山本の論文は「水準があまりに低いので、とりあげるまでもない」のだ

が、山本が論文の抜刷を大学、知友関係に配布したので、また、これこれのを噂を「伝えきいていた」ので、「黙って見過す」わけにはいかない、というのである。「修正主義批判を装った教条主義」という四段抜き大見出しで、「科学的理論」という明白な文字を「自著」とすりかえ、まして「事大主義的」「權威依存主義的」「セクト主義」とやらレッテルをおしつけた記事を抜打ち的に新聞に載せて全国に数万部ばらまいていた男が、その理不尽な非難攻撃を反駁して当の相手が自ら正しいと考える主張を書いて学校の雑誌に載せ、知友学生に精々数百部の抜刷を配布して事の真相を知ってもらうよう努力したと聴いたので、黙っているわけにはいかないというのである。また、これこれの噂を伝えきいたので、黙過できない、というのである。こういう言い方は、暴力団の「言いがかり」そっくりである。重大な「基本原則」にかんする議論で、このような「言いがかり」を弄して、わたしの主張に「公然たる党攻撃の歩み」というレッテルをおしつけ、「党攻撃」者との印象をひろめようとするのは、およそ理論闘争がどういうものかをわきまえない「やつつけ」攻撃であり、卑劣な「難癖づけ」である。「水準があまりにも低い」というなら、そのことを議論の中で論証して、理論的・論理的誤りを明確にすればよいし、またそうするためにこそ論争はおこなわれるのである。他の人々がどう言うか、どう「利用」するかを気にすること自体おかしい。まして、「水準があまりにも低い」論文など、どう「利用」できるといえるのか。

わたしが学生に話したのは、高原晋一氏著『賃金闘争』、いわゆる野坂理論（「アメリカ進駐軍は解放軍である」、袴田論文、「日本共産党綱領」等についてであって、それらがいずれもマルクス・レーニン主義から逸脱したものであることを説明したものであり、その説明内容は、わたしがすでに論文、著書として発表したもの、および本論稿において詳細に説明しているところを要約したものにすぎない。たとえば、高原氏の主張の徹底的批判は、すでに拙論「賃

銀論はいかにあるべきか?——修正主義的諸偏向の克服のために」(前・後篇)(本誌第十五卷第一、二号)でおこなわれ、「自然発生性への屈従と拝跪」、「修正主義的歪曲」という結論が与えられている。また、「党綱領」については、「党章草案」の当時から、わたしは、それが一九五六年ソ連共産党第二〇回大会でのフルシチョフ報告の中の最悪の修正主義的主張——「平和共存による世界革命方式」、「平和革命」論、「国会で安定した過半数が得られれば……」という棚ボタ式戦術論——をそのまま引き写したものでマルクス・レーニン主義党の綱領としては欠格のものであるという批判をくりかえし説明してきている。しかし、こうした高原理論の批判、綱領の批判は、党批判、党攻撃であつて許されないものだ、といえるであらうか? たとえば、榊氏らは、一九六三年以後になって、それまでずっと賞めちぎっていた「フルシチョフ同志」をばにわかに「フルシチョフら」と呼び、「フルシチョフ修正主義」なるものを痛烈に攻撃されているが、いったい、これはソ連共産党の攻撃だといつてよいであらうか? 今日ではその完全な反レーニンの性格が明確となったが、ソ連共産党新綱領を「反革命的」として批判することは、ソ連共産党を批判し攻撃することになるだらうか? 榊氏らは、最近「毛一派」と名指しで、「中傷的」攻撃を加えていられるようだが、これは、そもそも、中国共産党にたいする「中傷」であり「誹謗」であると言われてもいいと考えられるか? 同じことを自分が行うのは正しいが、他人が行うのはまちがい、けしからんというのでは、せつかくの「マルクス・レーニン主義者」という看板も泣こうというものである。これこれの「うわさ」をきいていたので「公然たる党攻撃の歩み」をしているのだ、ときめつけ、「党攻撃者」だといふらす、という氏のやり方も、賞められたものではない、「うわさ」ではなく、わたしの著書や論文について、平素の——またとくに選挙時の——言動をよく確かめて、事実について判断されるがいい。野坂理論や綱領の棚ボタ式戦術論の批判をきいた「忠実な」党員学生・助教教授らが、反駁できないために

自分の影響力の減殺するのを喰い止めようとして、例によって愚にもつかぬデマをつくって「党攻撃者」というレッテルをはりつけいいふらすのは無理からぬことでもあるが、その「報告」をきいた上級機関が真相を確かめ反駁の材料を授けるどころか、そのデマを真に受けこれに便乗して尾鰭をつけ、おまけに当の教授の演習に参加した学生や卒業生をとらえて「党攻撃者」だといいいふらすにいたっては、なんと評したらよいか？　むかしから、下、上に見なうという諺もある。「水準があまりにも低い」といいながら反駁することもできず、そのために「自分」を「党」におきかえて、「いいがかり」を弄して「党攻撃者」に仕立てあげて相手を「亡きものにする」という、この榊氏の「手法」について、わたしが心配するのは、こうした「手法」が平素から氏によって愛用されており、しかも氏の周辺ではこの「手法」がまかりとおっているという事実がこれによってはしくも暴露されている、ということである。こういう事実こそ、重大である。「自分」を「党」におきかえ党の權威をかさに「いいがかり」をつけて有無をいわず相手をやっつける、——この、まさに「ファッショ的暴力」の常用者が勤労大衆に「民主主義」などを説いてまわっているのは、狼が羊に向って「仲良くしよう」ともちかけている図をおもいださせる。

二 その(二)で、榊氏は「弁明」と「攻撃」とをあわせおこなっていられる。

「……『はじめから』やっつける『ために』いろんな『レッテル』をはりつけたものでもなければ、『最悪の』『教条主義』の主張だと断罪したものでなかった。……わたしの文章をもう一度よくよんでもらえば『最悪の』といった種類のことはどこにもない。しかしわたしは、山本氏について『教条主義者』という断定的規定も避けていたのであって、ただ『教条主義的、セクト主義的傾斜』……というように、きわめて抑制しながら書いていたのである。……山本氏は……とつばなから、右のような創作〔最悪という言葉——山本〕までして食ってかからなければならなかったのは、氏の弱さを裏書きしている。」

自分個人を党そのものになぞらえ党の權威をかさになんでも押し通すという氏の愛用手段が、ここでもよく示され

ている。はつきりお断わりしておくが、わたしは、ずっと以前から、真の「反帝反独占」・真の「人民民主主義革命」を支持しているものである。榊氏は、全く自分勝手に「のみとり眼」よろしく片言隻句を曲解して、「プロレタリア社会主義革命」の主張者だと思いいみ、むりやりその主張者に仕立てあげ、わたしを「教条主義」と烙印してやつつけようと目論んだものである。事実無根のデッチ上げを「修正主義批判を装った教条主義」という大見出しの論文で新聞のせて全国にばらまき、「科学的理論」という明白な文字を「自著」とすりかえ、まるで「事大主義的、権威依存主義的」とわめきたて「セクト主義的傾斜」だと書きたてている男が、なんと「レッテルをはりつけたものでない」とか「断定的規定を避けていた」とか「きわめて抑制しながら書いた」とか、よくもまあ、ぬけぬけと言えたものである！「教条主義」と大見出しに書いたが「教条主義者」とは書かなかった、と言うのも見苦しい。「最悪の」という言葉の意味が氏の書いている「きわめて危険な」と同じだということがわからなくて、その言葉を書いているというも、恥知らずな逃げ口上である。だが、もっとも理不尽で非道なのは、真の人民民主主義革命の熱心な支持者をとらえてむりやり「プロレタリア社会主義革命」の主張者にデッチ上げている氏のやり方、この驚くべき「創作」である。不当なデッチ上げ、レッテルはりについてその理論的・論理的錯乱とペテンとを反駁されると、たちまち開き直って「党攻撃者」だとわめきちらすというのは、いったい、榊氏のどんな「強さ」を示すものというべきか？これこそ、「最悪の挑発者、デマゴグ」でなくて、なんであらうか。

三 その(三)も、「二番煎じの『路線転換』論の自己矛盾」という凝った題名がつけてある。その中で、「山本氏がこの論文でこころみた主要点は、まず第一に、わたしの前回の文章を例にして『日本共産党の路線転換』なるものをつくらぬんすることであり、」

とあるところからみると、どうやら、榊氏は、三輪氏の拙著「推賞」が榊氏の「非難打倒のレッテルはり」に「豹変」した事実をわたしが指摘しているのは、それで「日本共産党の路線転換」を主張しているのだと考え、そこでわざわざ右のような凝った題名をつけたものだとということらしい。前稿(二)で「榊氏の『品性』の中で第六感の働きがとくに確か」(本誌第二十一巻第二号、四一ページ)と指摘された氏の「第六感」も、ここではすっかり狂ったものとみえる。はつきり申上げておくが、わたしは、いまだかつて日本共産党が「路線転換」をしたなどと思ったことはない。敗戦以後、とくに二・一スト以後日共路線は終始一貫していると考えるものである。だから、「二番煎じの『路線転換』論」などといわれても、すこしも痛痒を感じない。わたしがとりあげているのは、「共産主義の基本原則」の立場にたつての修正主義批判をこころみた拙著にたいする評価が、榊氏において「豹変」したという、事実そのものである。そのためにこそ、榊氏の攻撃論文を仔細に追究して、それが全くのデッチ上げに理論的・論理的錯乱を加えて成ったものだとすることを明らかにしているのである。ここでの第一の問題は、榊氏における批判の「豹変」そのものが「マルクス・レーニン主義の原則」にかなったものかどうかの究明にある。榊氏は、御自身の「豹変」について、「どだい、同一の本について見方がくいちがったり、ある人による評価が他の人によって妥当に是正されたりするのは、よくあることである」⁽¹²⁾という、見えすいた手前味噌を並べていられるが、この中の「同一の本」のかわりに「マルクス・レーニン主義の基本原則についての問題」とおき、「ある人」を「あるマルクス・レーニン主義者」におきかえてみるがいい。榊氏が「基本原則」の判断の問題をば、愚にもつかぬことを書いて読者を惑わす職業的「評論家」の書評の問題と全く同じに考えていることは、疑いない。つまり、氏の見地そのものが、「マルクス・レーニン主義」のそれではなく、小ブル的「評論家」のそれだということがここで示されているのである。

(12) 「あとから妥当に是正されることはよくあること」といつてのけるこの「唯我独尊」的人物にしたがえば、たとえば、近い将来「反党売党」の志賀氏らと「よりをもどす」ことが起きたとしても、それは、「あとから妥当に是正された」ものでなんの弁明も不用、ということになる。いつでも「あとから妥当に是正できる人物」とは、いつでも風向きしだい「豹変」できる人物」だということである。

この(一二)で、榊氏は、「このことには、万物は特定の外国を軸に動いているように見えるらしく、云々」という言葉を連ね、また(一三)で、「氏がはめたたえる人」とか「氏の帰依する外国の現存指導者」とかいう文句を並べていられる。これからみると、氏はわたしを「中共一辺倒」だと思いこみ、「対外盲従分子」の一味だと考え、そういうものに仕立てあげ、そういうものとして攻撃していることがわかる。これは、さきの「プロレタリア社会主義革命の主張者」というのにおとらぬ、下劣なデッチ上げである。お断わりしておくが、わたしはけっして「中共一辺倒」ではない。わたしは中国革命を指導してきた中国共産党はまことにすばらしいマルクス・レーニン主義党であると考えるし、中国革命の経験を真剣に学びとることが絶対に必要だと考えるものであるが、しかし、中国革命の経験をそのまま「直輸入」することには賛成しない。中国革命の経験を——今日の中国文化大革命をふくめて——厳密に科学的に研究し、正しく、「摂取」することが、ぜひとも肝要であるが、しかしその「摂取」にさいしては日本の諸条件を正確に分析し把握することが先決問題であると考えるのであって、この正しい「摂取」の必要といふことはいずれの国の革命の経験にもあてはまるものである。榊氏がどうしてわたしをしゃにむに、「中共一辺倒」に仕立てあげられたか、その動機はわからないが、その考えられる唯一の「手がかり」は、氏が「自著」とすりかえまで強行した拙著「はしがき」の一部分——「中国共産党指導部による国際修正主義の批判が、……その批判論点および結論部分について…

…本書の主張と軌を一にしている」——であると思われる。フルシチョフ修正主義にたいして同じ「マルクス・レーニン主義の基本原則」の立場から批判をおこなえば、その「批判論点および結論部分」が「軌を一にする」のは当然であって、そうならなければかえって不思議である。櫛氏は、この「軌を一にしている」という文字を「全く同じもの」と解し、しかもわたしが「中共指導部」にすっかり「同調」してその「正しさと威力」を誇示しているものと勘ちがいし、さてこそ「中共一辺倒」だ、「対外盲従分子」だとわめきちらすにいたったものである。わたしが、「軌を一にした」という事実を指摘したのは、わが国では他人——とくにレーニンやフルシチョフやの——の文章をそっくりそのまま無断借用——剽窃——して自分が「創造的に」つくりあげたなどといふらす「品性」の持主があまりにも多いので、そういう連中と同列に見られなくなかったからである。ところが、この事実の指摘をとらえて、たちまち「中共一辺倒」分子にデッチ上げ、この全くのデマを全国にまきちらし、ありとあらゆるレッテルをはりつけて「亡きもの」にしようと思つたのが、ほかならぬ櫛氏その人であったのである。まさに「下司のかんぐり」で理不尽なデッチ上げをし、そのデッチ上げをまきちらし、そのデッチ上げにたいして反駁を加えれば有無をいわさず「党攻撃者」だとしてやつつける、——このおどろくべき「ファッショ的暴力」が氏の周辺でまかりとおつて、という事実、この典型的な挑発者の相貌を具えたデマゴークが「指導的」な「マルクス・レーニン主義者」を装っているという事実には、重大な関心をよせないわけにはいかない。

四 その(四)は、「わが党の先駆性を傷けることはできない」と題されている。本論稿(一)で「現代修正主義の巨魁と目されるフルシチョフ一派にたいして『わが国のマルクス・レーニン主義者』がどんな先駆的な闘争をしてきたか、それを実証する事実をたつたひとつでもよい、どうかはっきりと示してくれたまえ」(前出、三三ページ)と要請

したのにこたえて、榊氏がただちに「先駆的な闘争を実証する事実」をあげてくれたものである。このようにすぐこたえてくれたことに、わたしは謝意を表する。これからも質問や要請にこたえてどしどし事実を出してもらいたいものである。まだ全然答えてくれない問題もたくさんあるし、これからもいろいろ出すから、どうか早く、はっきりとおこたえいただきたい。そして、真実はいかにあるかを読者諸君といっしょに究明していこうではないか。ところで、榊氏のあげられる「事実」は、こうである。

「わが党はこの主として国内での闘争をやるだけでなく、フルシチョフに代表される修正主義の国際潮流にたいする理論闘争でも大きな力を発揮した。それは、たとえば、はやくも一九六〇年の八一九カ国共産党・労働者党代表者会議でわが党代表が八十以上におよぶ修正案を提起し、会議の『声明』をマルクス・レーニン主義の原則にかなったものとするために奮闘したことをあげただけでもあきらかであろう」（傍点―山本）。

問題はまさに「フルシチョフ修正主義と先駆的に闘争したか否か」にある。榊氏は、一九六〇年八一九カ国諸党会議で他の八〇カ国諸党全部がフルシチョフ修正主義のとりことなって八〇以上のフルシチョフ修正主義に毒された誤りがわからなかったといい、そのさい日共代表だけが八〇カ国諸党全部にさきがけていち早くその八〇以上の誤りを指摘し、これを正しいものに修正させるために奮闘したといわれる。だが、八〇カ国諸党全部がフルシチョフ修正主義のとりこになっていてフルシチョフ修正主義に毒された八〇以上の誤った箇所を全然見逃していたなどというところが、事実あったものだろうか？ もしそれが事実だとすれば、八〇カ国諸党全部にとってこの上もなく不名誉なことであり、世界革命運動の歴史からみても由々しい問題である。榊氏は「八〇以上、あげただけでもあきらか」といわれる。だが、「八〇以上」とあるだけでは、数字だけで、中味はわからない。世間には、声明文をつくると

き、「見透し」を「展望」になおし、「現在」を「今や」とおきかえてそれでりっぱな「修正」をしたなどといふらす手合も少くない。だから、榊君よ、できるだけやく「八〇以上」の修正箇所について、その内容をはっきり示したまえ。どういう原文を日共代表がどのように修正したか、しかもその修正にたいして他の八〇カ国諸党代表全部がどのような異論を唱えたかをすっかり説明したまえ。もしその内容を示さず、ただ「八〇以上」という数字だけで「日共指導部の先駆性」を誇示しているならば、これは客観的には、八〇カ国諸党の名譽をいわれもなく不当に傷つけその顔に泥を塗って自分ひとりだけ「良い子」になろうとする世界的挑発者、「各国共産党間の団結の基準」などというもっともらしい文句をかかげながら八〇カ国諸党全部を中傷し誹謗する国際的分裂主義者、最悪のデマゴグに類するものといわなければならないであらう。

「事実」をあげると称して榊氏はまだ「数字」しか示すことができないので、わたしはこのさい、別の方面で事実をあげよう。(八〇カ国諸党全部がフルシチョフ修正主義のとりことなって、日共代表に指摘されるまで八〇以上もの誤謬を見逃していたという榊氏の指摘が、事実に合致したものでいかうかも、いづれ行論で事実によって確められるはずである。)榊氏がその著『現代修正主義とはなにか』の中で、「フルシチョフらの修正主義思想」が「五六年の第二〇回大会当時からしだいに発展してき」たが「一九六一年一〇月のソ連共産党第二、三回大会では」それが「ひとつの体系化をいづつあることが明確化された」(一一〇ページ)と力説されていることはすでに指摘したが、右の「体系化」の極致を示したものがまさに「ソ連共産党新綱領」であり、この「新綱領」こそ世界革命運動にたいする最悪の裏切り、恥ずべき物質至上主義の反レーニンの綱領だということは、今では明白な事実となっている。ところで、もしこの第二、三回大会に招かれて出席し、その席上でフルシチョフに絶賛の拍手を送り、帰国後その「新綱領」を心から賞めた

たえた論文や報告をものしている人間がいるとしたならば、この者は、どういう種類の「マルクス・レーニン主義者」といふべきであろうか？ これこそ真正正銘の「対外盲従分子」、「フルシチョフ修正主義のたいこもち」、「事大主義者、権威依存主義者」でなくて、なんであろうか？ 読者諸君、この真正正銘の「対外盲従分子」、「フルシチョフ修正主義のたいこもち」は、いったい、誰だと考えられるか？ それはなんと、**榊氏**その人であり、これと同じ「品性」の一部「指導者」たちなのである！ 第二回大会の席上でフルシチョフに熱烈な拍手をおくり、彼を賞めちぎった報告を、「新綱領」を「人類の夢を実現する新綱領」と手ばなしで賞めちぎった報告論文を、書いている当の人間が、なんと、第二回大会で「フルシチョフ修正主義の体系化が明確化された」などと書き立てているのである！ 榊氏のこの報告論文や他の人々のフルシチョフ「新綱領」を賞めたたえた諸論文については、いずれ行論において慎重な吟味を加えられなければならないと思うが、ここではとりあえず諸事実を並べて、これらの事実そのものをして榊氏その人の「品性」のほどをあますところなく語らせることにしよう。

一九六〇年八一九カ国諸党会議で「フルシチョフ修正主義とたたかい、八〇以上もその誤謬を訂正するために奮闘した」と自ら称する人々が、翌六一年六月には「二〇回大会のフルシチョフ報告は完全なマルクス・レーニン主義である⁽¹³⁾」という論文を公表し、それから二ヶ月後、フルシチョフ報告の中の最悪の修正主義的主張——「平和革命」論と「国会で安定した過半数が得られれば、……」という棚ボタ式戦術論——をそっくりそのまま「創造的に」借用して成った「日共綱領」を決定し、またその二ヶ月後に、ソ連共産党第二回大会に出席してフルシチョフに懸念の拍手をおくり、フルシチョフを賞めちぎり、フルシチョフ「新綱領」を絶賛した論文を書いてつぎつぎに発表している！！ これらの事実を並べてみるだけで、「党の先駆性を傷けることはできない」とか「第二回大会でその体系化が明

確化された」とかいう榊氏の主張がどんなに悪質なまやかしであるか、また、榊氏その人の「対外盲従分子」的傾向がどんなに一貫した、根強いものであるかは、明々白々である。

(13) わたしは本論稿(一)で、「前衛」第一八二号の袴田論文をあげ、その主要部分を引用して、それがフルシチョフ修正主義と「先駆的にたたかった」ものかどうか、「はつきりお答えねがいたい」と榊氏に要請しておいたが、榊氏は、この質問にはすこしも答られえず、卑劣にも「山本氏は……袴田論文がフルシチョフ報告を引いて日本の『構造改革』論者を批判していることを嘲笑している」と書きたてていられる。すりかえ、まやかし、いかげんにするがいい。袴田論文は、フルシチョフ報告を引いて構造改革論者を批判しているものではない。その題名が示しているように、この論文は、フルシチョフ報告をば「マルクス・レーニン主義」だとし、それを構造改革論者が歪曲しているといつて攻撃しているのだ。「袴田論文は、フルシチョフ修正主義と先駆的にたたかったものかどうか？」という肝腎の問いをすっぱかしておいて、山本は「袴田論文を嘲笑している」などというデマを書き立てるとは、またなんとあさましい「挑発者の相貌」の煽動政治屋であろうか！

五 榊氏は「挑発者の相貌とかれの『革命論?』という奇妙な題名をつけた(五)で、わたしの出した問題——「人民民主主義革命とプロレタリア革命とは、どこがどのようにちがうか?」——にたいして、予想どおりの答えを示されている。

「山本氏にはまったくお気の毒だが、この反論はかれの理論的素養の欠除を自己暴露するだけである。レーニンの『二つの戦術』はおろか、氏がしばしば引用してきた『プロレタリア革命と背教者カウツキー』だけでも入念によんでおけば、プロレタリア革命が民主主義革命と区別されることはたやすく理解されたことであらうし、みずから赤恥の種をまく必要もなかったであらう。

当面の革命段階を民主主義革命(反封建のブルジョア民主主義革命、反帝反封建の人民民主主義革命、反帝反ファシズムの人民民主主義革命、反帝反独占の人民の民主主義革命など)とするか、それともプロレタリア社会主義革命(プロレタリアートの指導のもとに、資本主義制度の廃棄と社会主義制度の創出をめざす革命)とするかは、由来、革命論の中心問題であり、わが国でも戦前の二七年テーゼや三二年テーゼをふりかえるまでもなく、いくたの論争を経てきたものである」(傍点およびゴシック体——山

本)。

この神氏の「権威的」主張は、人民民主主義はおろか、民主主義とか革命とかいう基本的な言葉についての初步的素養の欠如を自己暴露するものであって、行論においてもとくと詳細な論究が必要であるが、ここでは紙数の制限があるので、やむをえず、そのはなはだしい理論的・論理的錯乱を示したところを摘記しておくことにしよう。

①レーニンの二著や二七年テーゼ、三二年テーゼを銜学的に引用しているのは、問題がブルジョア民主主義革命ではなくて、まさに人民民主主義革命であるということの意味が全然わかっていないこと、つまり、人民民主主義革命が日程に上ってきた必然的な根拠、その世界史的意義が全くつかめず、「由来」などと称して、両者を同じ性格のもの——つまり同じ「民主主義革命」——として一緒くたにしている愚を自らさらけだしているものである。

②「ブルジョア民主主義革命」と「人民民主主義革命」とを同じ「民主主義革命」とし、これらは「民主主義革命」だから「プロレタリア社会主義革命」に対立するものだとして置いているのは、申し分のない錯乱であり、たわごとである。「プロレタリア社会主義革命」は「民主主義革命」でないか？ とんでもない、それはもともと徹底した、真の意味での「民主主義革命」であり、まさに「プロレタリア民主主義革命」である。だから、「民主主義革命」というかぎりではいずれも同じで区別はない。だが、それらの内容は根本的にちがう。「ブルジョア民主主義革命」は「ブルジョアジーのため、資本のため」の「民主主義」をつくりだすものであり、「人民民主主義革命」および「プロレタリア民主主義革命」は、「プロレタリアートを主導勢力とする勤労人民のため」の「民主主義」をつくりだすものである。だから、同じく「民主主義革命」とはいえ、その実際の階級的内容に照してみれば、当然、一方における「ブルジョア民主主義革命」に対して、他方における「人民民主主義革命」および「プロレタリア民主主義革命」を対

立たせなければならない。

③「ブルジョア民主主義革命」は、——その一典型、フランス革命をみよ、——ブルジョアの生産の発展・拡大に、資本主義世界の発展・強化に、ブルジョアジーの独裁に途を開くものであるのにひきかえ、「人民民主主義革命」は、資本主義の全般的危機の深化という世界的条件の下で資本主義世界を掘りくずし、その縮小部分的変革、社会主義世界の発展・強化をもたらすものであり、当該国については社会主義の基礎の発展・強化に途を開くものであって、まさに世界プロレタリア革命の一部分であり、当該国の社会主義的変革のための不可欠の一段階を構成するものであり、プロレタリアートが終始主導勢力となり基幹部隊となつて強力的に最後までおしすすめていき世界共産主義革命を達成するための不可欠の一部分、一段階であり、かくしてそれはりっぱにプロレタリア革命——厳密にはプロレタリア革命の一部分、一段階——であるといわなければならない。周知のように人民民主主義は、プロレタリアートを主導勢力とする人民各層の連合独裁であり、したがつて、プロレタリアートの独裁の一形態ということができる。この「人民権力」を生みだす「人民民主主義革命」を「ブルジョアジーの独裁」を生みだす「ブルジョア民主主義革命」と同じもの、同じ「民主主義革命」だと主張するには、どんな無知、恥しらずの厚かましさが必要であろうか？ だから、「権力」の階級的内容に即してみても、一方における「ブルジョアジーの独裁」をもたらず「ブルジョア民主主義革命」と、他方、これに対立する「人民権力」および「プロレタリアートの独裁」をもたらず「人民民主主義革命」および「プロレタリア社会主義革命」を厳に区別しなければならない。

④ 榊氏が「人民民主主義革命」と「プロレタリア革命」との関連はどうかというわたしの質問にたいして、その関連が皆目わからず、その「品性」のおもむくところ、この問題を「民主主義革命」と「プロレタリア社会主義革命」

の關係の問題にすりかえて、右に見たような術学的タワ言を並べていられるという事實は、榊氏において、「民主主義」と「独裁」についてのマルクス主義的知識が完全に欠如しており、弁証法的に事物をとらえる能力が完全に欠如していること、人民民主主義革命の世界史的意義、その基本的内容について理論的素養どころか初歩的知識すら欠如していること、氏の頭腦を占めているのは、マス・コミそのままでの考え方、つまり「民主主義」と「独裁」とは真つ向うから対立しているものであって、われわれは「強力」による「独裁」は排撃して「強力」ぬきの「平和と民主主義」で世の中をよくしていかなければならないという、俗物的・ブルジョア的・反レーニン主義的考え方ではないということ、如実に示しているものである。

⑤わたしは、榊氏についての右の事實を予想して、「人民民主主義革命とプロレタリア革命との関連はどうか」という問題を出したのだが、果せるかな、氏は予想どおりの答えを、しかもすりかえまで伴って、出してくれたのである。右の「プロレタリア革命」についてのわたしの説明に照らしもみて、わたしが「人民民主主義革命」を支持するものであることは、あきらかだと思ふ。そのわたしをとらえて、しゃにむに「プロレタリア社会主義革命」の主張者⇨教条主義者にデッチ上げようと懸命に狂奔している榊氏自身が主張する口先きだけの「人民民主主義革命」などというものが、氏の告白されるとおり「ブルジョア民主主義革命」と同じ型のもの、つまり「日和見主義的改良」の域を出ないものだということも、以上によって明瞭にうかがえる。こういう「品性」の連中が唱える「民主的統一戦線」などというものは、全くのお題目にすぎず、その中味は、例によって例のごとき「大衆引廻し主義⇨大衆追隨主義」にはかならない。

こうしてみると、「理論的素養の完全な欠如を自己暴露」して「赤恥の種をまい」ているのは、まさに榊氏その人

で、誠に「お気の毒」というほかないが、これは、氏の「品性」の不可避免的な帰結でもあらう。

六 『『のみとり眼』の空論の結末』という題の(六)では、「修正主義」についての榊氏の「定義」にたいするわたしの批判にこたえて、氏は、これまた予想どおりの答えを並べていられる。その要点をあげてみよう。

①わたしが批判した「狙い」は、榊氏の「定義」がレーニンの論文の該当箇所をそっくりそのまま無断借用——剽窃——してつくったものだという事実を明らかにし、このように剽窃を事とするような論者はかならず重要な点でその内容を曲解し、改ざんするものだということを事実をあげて示すことであつた。その曲解と改ざんの箇所は、だいたい、つぎのようなものである。——(イ) 修正主義がどこから生れたかという決定的な問題で、レーニンが「外部から」と説いているのを、氏は「内部から生まれ」と改ざんしていられる。(ロ) 修正主義との闘争について、レーニンが「哲学、経済学および政治の各分野」として説明しているのを、榊氏は「哲学、経済学、社会学、理論(革命理論)」の分野」と改ざんしていられる。(ハ) 榊氏は「実証主義の根本命題を修正しようとめざす」という無意味な言葉を挿入して内容を混乱したものにしていられる。(ニ) 氏は、「意識的にか無意識的に科学的マルクス主義理論を改良主義的見解にとってかえる」として、修正主義がまさに意識的、積極的に「修正」のために闘争しているというレーニンの指摘を骨抜きにしていられる。(ホ) その他の無意味な、またでたらめな附け足しと改作。

剽窃と改ざんを暴露された榊氏が躍起となつて論駁していられるのは、(イ)と(ロ)についてだけである。

② 「修正主義がどこから生れたか」は、修正主義発生の必然的な根拠、その社会的な基盤を指すものであつて、それにたいする答えは、決定的な重要さをもつ。レーニンは、「外部から」と答え、「敵対する階級」と「資本主義」という、その「必然的な根拠」を明らかにしている。榊氏はこれを根本から改ざんして、「内部から生れる」と述べ

ていられる。つまり、「マルクス主義そのものの内部に修正主義が発生する必然的な根拠、社会的な基盤」がある、と主張されるのである。なんとおどろくべき「弁証法」の専門家であろうか。

③ (四)について、榊氏は、「レーニンがマルクス主義の理論分野を『哲学』『経済学』『科学的社会主義』とした」から、レーニンの挙げている第三の「政治の分野」を変えて「社会主義理論(革命理論)の分野」とすることは正しいのだと強弁していられる。レーニンは、「修正主義の思想的内容はどのようなものか」を明らかにするために、「三つの分野」に分けて、それぞれの「分野」でどのように「修正」しているかを明らかにしている。このばあい、「マルクス主義の理論分野」の「分け方」をもってきてそのままではめおきかえてみたところで、なんの意味があるというのか？ これこそ、まさに斜視の「のみとり眼」の空論である。

④ その他の改ざん、無意味な挿入、たわごとについては、全然答えはなし。デマとレッテルのたねもつきたと見えて、レーニンの論文から全然見当はづれの一節を引いてむりやり悪罵を浴せようと懸命の態でいられる。

榊氏は、その反駁論文の末尾で、

「われわれはしいて事をあらだてるつもりはないが、不当な党攻撃や評論にたいしては断固たる打撃をあたえるのにやぶさかではない。」

と述べていられる。「下司^{ゲス}のかんぐり」そのままにんの根拠もなしに、真の、「人民民主主義革命、民主的統一戦線」の熱心な支持者をとらえて、「プロレタリア社会主義革命」を主張する教条主義者、セクト主義者にデッチ上げ、「中国一辺倒」分子にデッチ上げ、曲解とすりかえ、ペテンを弄して各種のレッテルをはりつけ、そのデッチ上げ記事を全国にばらまいた男が、なんと「しいて事をあらだてるつもりはない」、と言っている!! その全く不当な

攻撃、「やっつけ」にたいして当の相手が弁明し、その「やっつけ」の理論的・論理的錯乱とペテンのほどを明白にした反駁論文を書けば、「不当な党攻撃や評論にたいしては断固たる打撃をあたえるのにやぶさかではない」、とす
ごむ!! これは、ゆすりに失敗した下司^{ゲム}なチンピラの「おどし」そのままである。この奸智にたけたチンピラは、「卒直にいつて、山本氏がながながと党攻撃『論文』を書けば書くほど、『学者』としての権威をいつそう失墜させることになりそうなのを、わたしはかえって、氏のために惜しむものである」などとしたり顔で述べているが、これは、つね日頃自分個人を党そのものに仕立てて反対者を圧しつぶしてきているえせ「指導者」の「捨てぜりふ」であつて、これまた本人の「品性」をこよなく明示するものである。わたしは、むしろ、氏のデッチ上げ攻撃のおかげで、一部の「指導的」な「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「品性」の実体をつぶさに知ることができ、かれらの理論的・論理的錯乱と「ファッショ的暴力」がどんなにマルクス・レーニン主義の修正主義的歪曲とかたく結びついているかを——正確な材料によつて——改めて確認することができたことを、榊氏に感謝すべきかとも思うが、それにもまして、まったく心痛にたえないのは、こうした「品性」の持主たちが「指導者」として、党を傷つけその権威を失墜させ、おびただしい数に上る誠実な協力者の参加を「暴力的」に締め出し、「大衆引廻し主義」大衆追隨主義のえせ「統一戦線」をふりまわして、真の統一戦線の結成をふみにじっているという、この現状である。

(一九六七・九・二〇)